

社会技術研究開発事業の歩みと 追跡調査・追跡評価

独立行政法人科学技術振興機構
社会技術研究開発センター
平尾 孝憲

本発表の内容は個人の見解であり組織を
代表するものではありません

科学と科学的知識の利用に関する 世界宣言（ブダペスト宣言）

- 1999年（平成11年）7月 世界科学会議
（UNESCO、ICSU共催）
- 21世紀における科学の新しいあり方
 - 「知識のための科学」
 - 「平和のための科学」
 - 「開発のための科学」
 - 「**社会の中の科学・社会のための科学**」

「社会技術の研究開発の 進め方について」(1)

- 「社会技術の研究開発の進め方に関する研究会」(平成12年4月～12月)、座長 吉川弘之日本学会
会議会長(当時)による提言
- 推進すべき「社会技術」研究開発の特徴
 - 社会の問題の解決を目指す技術
 - 自然科学と人文・社会科学との融合による技術
 - 市場メカニズムが作用しにくい技術

「社会技術の研究開発の 進め方について」(2)

□ 社会技術プロジェクトの研究体制

□ 恒常的な研究拠点の設置

- 異なる領域の研究者が日常的にディスカッション
- 課題・リーダーの選定、目標設定、プロジェクト内・プロジェクト間の交流・融合などを**一体的に推進**

□ トップダウン型の研究

- 目的指向型の流動的研究組織に、**人文・社会科学の領域の研究者の参画**を得ての流動的研究体制
- 行政ニーズ等を踏まえた戦略的課題、3～5年で成果

□ ボトムアップ型の公募研究

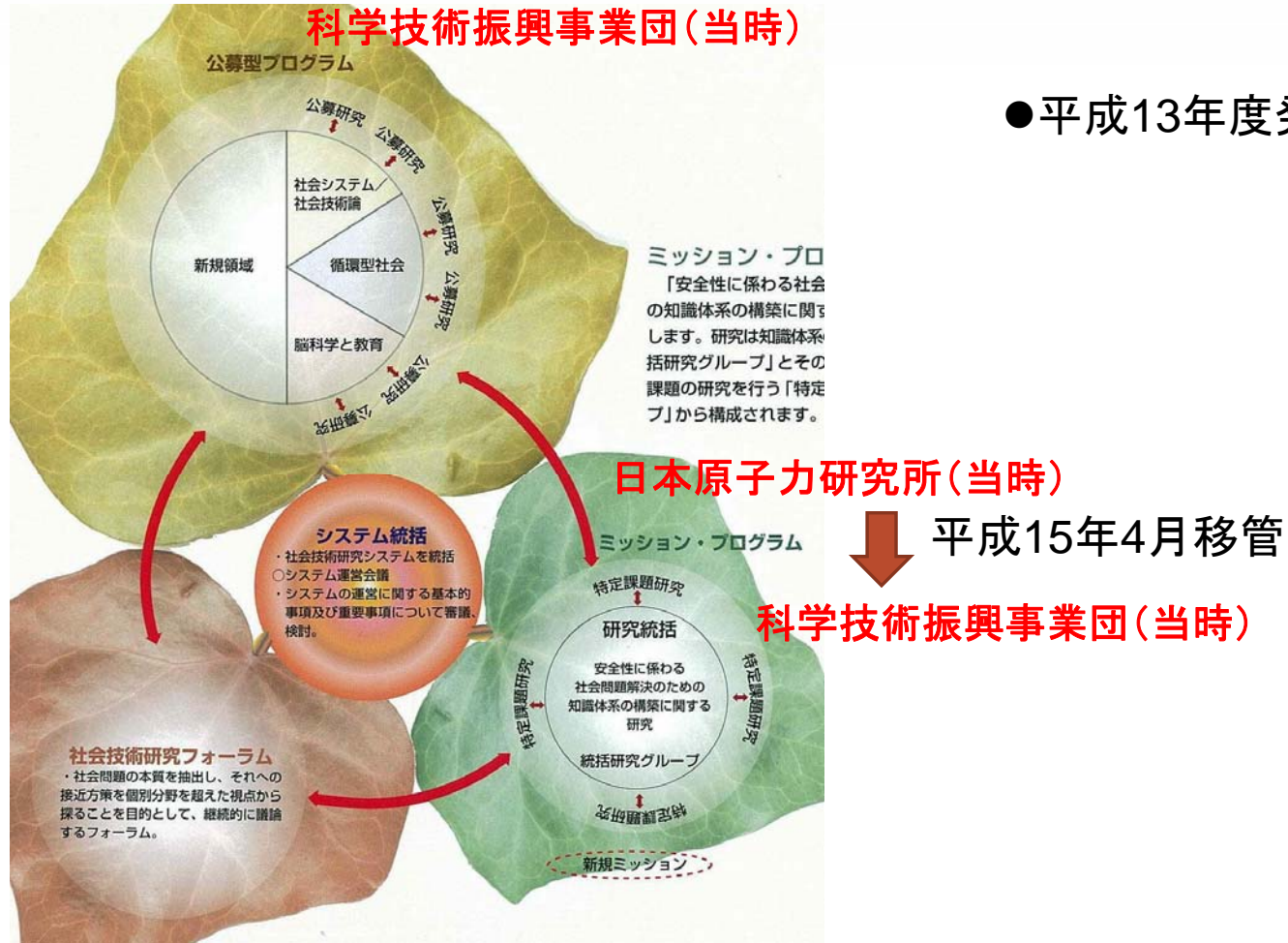
- 広範な層からの課題の発掘、あぶり出し

「社会技術の研究開発の 進め方について」(3)

□ 課題の評価

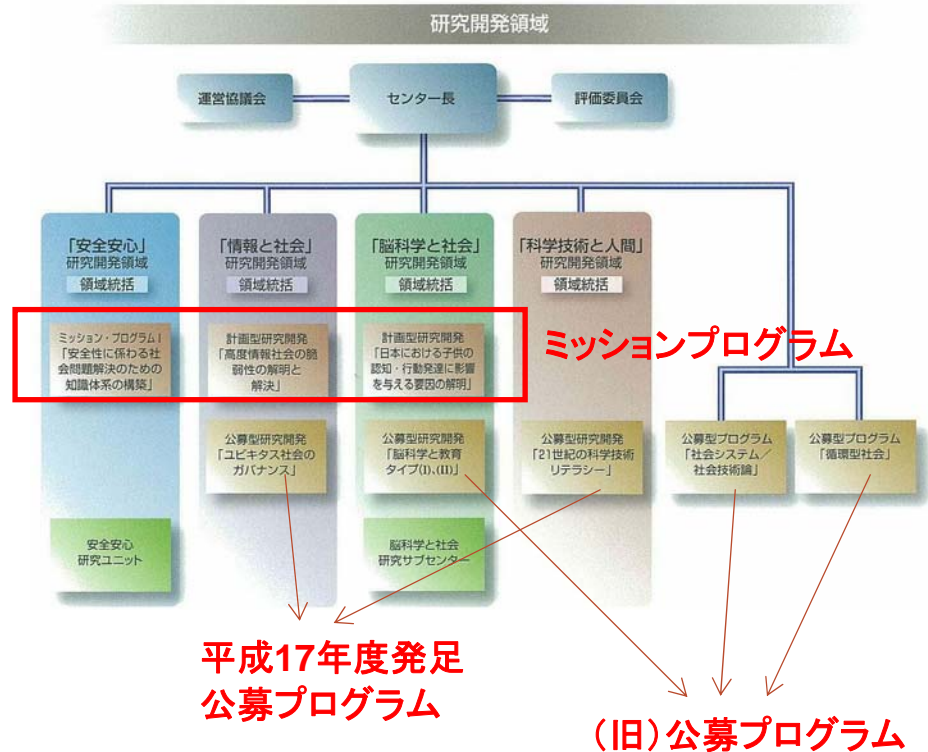
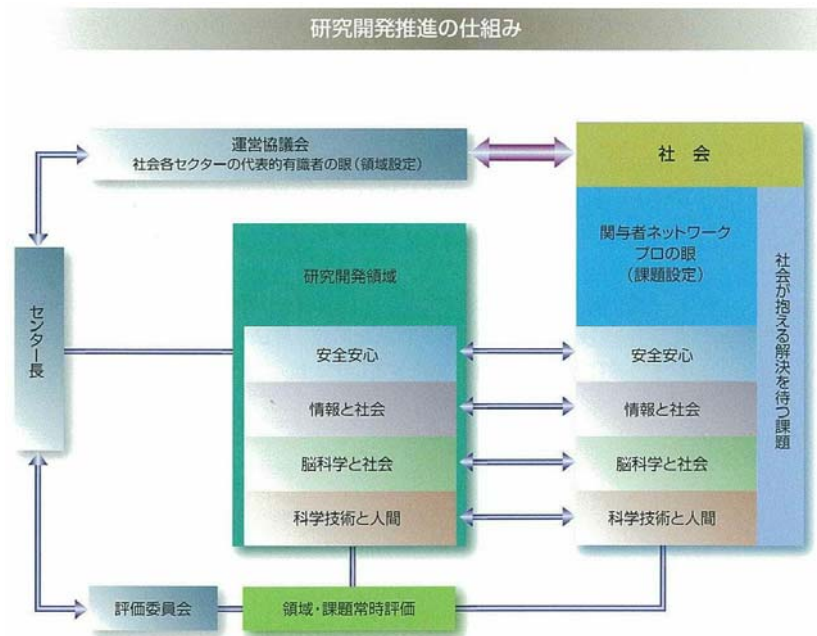
- 『ユーザーを含む外部者による緊張感のある評価』
- 『シンポジウムを開催する等により、研究計画についてユーザーや幅広い研究者等からの意見を聴取し、研究計画等に反映』(事前評価)
- 『常にユーザーの意見を研究にフィードバックさせながら、一定期間で具体的成果をあげることに向けて研究を絞り込んでいく必要がある。』
- 『社会技術の研究開発の特性を踏まえた評価基準を早期に策定し、評価される側にも具体的なイメージが提示されるようにする必要がある。』

社会技術研究システム



本発表の内容は個人の見解であり組織を代表するものではありません

社会技術研究開発センター（平成17年度）



研究開発領域の導入 センター長によるマネジメントと運営協議会、評価委員会

本発表の内容は個人の見解であり組織を
代表するものではありません

ミッション・プログラム1事後評価

□ ピアレビュー観点の評価

- 目標達成
- 技術的貢献
- 社会的貢献
- 副次的貢献

ミッション・プログラム1事後評価

□ アカウンタビリティの評価

- 「安全安心に関する社会技術」という新しい研究分野をどれだけ推進できたか
- 当該研究分野においてどれだけ人材を育成したか
- 当該研究分野がどれだけ社会的に認知され、広くその概念普及が行われたか
- 当プロジェクトにおいて開発された社会技術が実際の社会問題を解決する手段として政策・行政などに反映され、社会問題の解決に活用されたか、あるいは反映され、活用される見通しがあるか

ミッション・プログラム1事後評価

□ 今後の社会技術研究に関する取り組みへの提言

- テーマ設定等計画段階の充実 → 平成18年度後半から実行
- 国際的な視点
- 社会への実装
 - 『今後、社会技術の研究開発を進める上では、「社会実装」の理解を共通にして、研究計画について共通の土俵の上で十分な検討を行うことが望まれる。』